



五元集  
亭

14  
3157  
16(2)





14  
3157  
16  
(2)



坂東藏書

得雲やのら二見へる者や  
重井よみしけれの  
傘扱ふ月ふ居しすも也

本母さふまの命あつた  
名月やそ住者のつた

名不月

館 節上

小くくちつた月や石浮

雨

上 嘉佐野  
約よめて金貫指りあ  
川節の園をふいらる



十段巻

巻十

秋月やいらもあつきの男  
水相観の繪

あきまてよめをあらわす

名月や尾酒のまじり  
頬より

得蟹無酒

懈を画ては友遠する月

名月や五のうらみ松の影

雨

納屋のゆゑに吹雪くけり月

名月や舟を定むるむら雀

受うとよめ早起て月の色



あつきの男

更にと祿宜の舞や松の月

紀

きりりりあまのあやこころ

所思

あつきの男

名月や金らふひまの雨の友

園のあひ言ふはらり月あや

月あそびはたはく小舟あ

人音や月たのむに伏見村



維摩のりし

山のそへ大衆しりり床の月

張良圖

胸中り出するあはれ月

布衣の月を掬し給ふ

ありてあき水の月をや爪をよ

寺

古の月あはれ膾炙するもん

名月やうやくゆき袖に松

ホウレエの  
鳥帽子屋の急はふりんとしりり月

閑倚橋

猿遠の家とんとや橋乃月

含香亭

雨まよ入目を花柳やきよ乃月

風雨

雷子梅ハあはれきそりらん舟

小野川けんきゆうの饑

入月や琵琶を袋あかすありん

三日糧をつむとらふ

名うら十歩子錢を握りしり



巴江

聲のれく猿の齒白し暮れ月

舟中よふていを夢て袋のよ  
こころ杖の楫よぬるを

日たるも杖よつかけ小舟よ

琵琶はあよむ

言わよ比巴を興い夜も扇  
筋の赤よ思ひおに酒をこ  
灯をきめては交いやすよ  
村雨の心をほりし私雨の耳  
をていふら感ありる十三  
より字はるし曹保々秘曲  
もはそか人を泣くむすける

すまひもてつらうよこたえ云々  
其在困ある時て所と色をひ  
とあつものあつてはる好遊  
物を投出たつて世風情乃人  
一藝何うやさいつを

十五酒をのこむとげあの日

あさつ舟よつみを入る  
目をこぼすの水干  
扇のし

かりしあつて唯月舟

新境 京よ

はたぬ事こころを有きよのこ



母の月をけりて

あはれは雨え改乃十三夜

旅泊

ふれや江尾て三種湯千三夜  
葉研てハ粉炊からすう湯の月  
住の江や夜芝居さそて浦れと  
白玉子辛を交たやけり月  
ほの目上の太子れあおら  
去うとすお茶師が旅馬の  
あつと躍りけり日傘

十三夜を

やよ月あつ物あき木柳可

国十五夜

あつ夜あつは  
はるあつは

脚番衣ハ照月をら瀬河舞

平家源氏の  
乙舟月夜

宿あしのをしれては月かんが

柴少のあつは

名月や鞆者人の心世後  
あつや人を抱身を膝尻  
待衆山  
てよみ満里棹のあつあつ鳥



契不逢憲

圀の灯も光るを影や油の月  
一休の狂詠自画を写す

甲申律師め相刺をして日茶

松前のまひ子中

送り侍り

こころを大根て 清さん 秋の月

十六宿ハ儒者と名をよみ 詠

漬藁の穂子 丸月 とき ちあふふ

日十三お

笈の菓子たつるまき月

病中制禁好

松樹乃津海氣をらすや月友

秋宅

ひ浪をわけてみをやけの月

宗因の月をうらむるを

芋ハく九傷都の二百貫

きりしひひんまのちをいひ

物うらとち豆りり袖の月

鐘声 客船

名月や市堂の鼓をひきて

遊子の身あるを松の影も江の月



鷹鳴や弓弛を三れを身おれ月

玉津竹尾を

わのらむつふ井の月をばたけ

いさよひや龍眼肉乃うら

上交詰上

平定心しあふ龍女六月

吉野のやまをさへし

こよひしれすくぬきよの月

世そらうりし藤あそ

秋政の月らん所や九月

九月廿七の月を惜

あつ家と云

文月や陰を感じはるぬ屋の中

七や暮あゆみ入て笛をす

星合やひうよ瘦地の風つらり

雨好

鶯や石をかりの橋もよ

星名ぐら星お一愛あひま

新居

塀梢より久よか詠何

天川けあのちじや一志海



まのこよそ

踊子をまてりくく星ハ北

侍能

刺精も廣るふ羽をうけり  
舞あそび花つげたりわらわ  
二軍をぬむ隣わもむあま  
かきしきや丸ちのちよこ川  
早急やあの子あそびあはん  
何一あひや見えあぬる言灯籠  
丸舞の治やあまをれ早む

地敷子のあひり

星阿比や双林塔を能の音  
橋と成鳥ハいつき夕あつた

七月歌の飯前山子

あけてはけはるるを軽し相の秋  
首花や角堂も星れあつら

小娘の生はきこまじしけ確



中島崎の菰火の筒のわら音  
粉ふくたをさも逆橋もわらや  
玉川のあゆみ  
菰火の賣

水汲の曉起やすまの船

増上寺晚景

馬老燈籠使のたきく

まろくろく おろしきま

新水の敷くよらも徳の傘

弄化生

あいらの子字はさあや天川

松徑よみかもあつり傍の  
袖よりあひあつるを  
りの授記局の有無價宝珠  
と説せぬ心をあつらて

夜あつる玉や玉や

永げ島子あそぶ

慈山火を昔のまけや玉匣

あすくく門の食ら就とん

子あそび人や隣の玉や

得平酒

洲の隣あつめや生並玉

陌上塵

五十三



桐花千枝ありきれば阿婆  
見る人もよふ灯籠千枝あり  
送りゆく一室の煙十文字

千々よ 黄葉千枝あり

お豆あまのつれ一山下二山  
稻つまやまのふふふふ

妻のおくれては  
子やうたをたをたをた

らあしあや思ふよふも繪も  
伴勢の鬼にうしあひなる羅  
およもあや雷聲の舟も

舟興

まをり花火のよあききふ  
扇的も火くくくくくく

あよる三節を悼して

お灯よりあやある秋のせ  
野灯のうらをかんつやせその

悼コ齋

其人の軒はしあ秋の蝉

投られてはあやうけお撲



よき衣の陣しやあさしん丸  
ト石や志よこよぬれてはお撲

赤のしりかきも賣やお撲礼  
相撲氣を髪月休の夕家  
山城のあしはぬ形や治西氏

遊品御も

赤屋や六尺は人唐多尼  
中の御もて

幸清り夢のほつきや昔松

雨後 二句

あまうくる芭蕉よのりて  
陣時を雷お顔よつと  
昔の日陰ありあり中夾布  
舞の立ちのやああ物  
株のよや茂もうけては松原

種竹 三年

竹乃色許由ういささやう情

つらももははあはり庭の萩



長生を愛野をわたりて  
角ふまやいせの世飼乃花為  
思ぬわらしらあや秋の言  
芋の種や鱒をやとておかし

客至

おる池汲あるの場や夢のむ

暮暮とらふま

お影よふあやふ年のふみ  
花もりし佐助の屋乃花を  
酢をとあると隣の夢の花盛

三遠ち納

子稻酒や稻荷よひかた焼めと  
病のちやほ芽あくおるる後  
頬指やおのいせ人は出包を

野店無肴核

是あつる亭をよもを新酒小  
酒買子りるあおの房流ッ

ほ芽あまし

化野や焼のらじの骨ハクリ



春日法樂

と哉日秋の影借をうけうふ

四所の宮の影をうけうふ

成の刻をうけうふ

野外夕虫とらふ影をうけうふ

相模川洪落水接天

狼の浮木ありや影のあり

二挺きの帰棹

影をうけうふ

新瓦や松のあけの清園を

こぼらしきの影をうけうふ

平斐のや江のくさし柳のたう

影をうけうふ

みの影をうけうふ

破きし孫の志津をうけうふ

向ふ長者の影をうけうふ

中なる小孫の影をうけうふ



初めのお巻

さし椎の音を仕すハ礎りも  
奥好乃殿やうつくしうらな

きき里小野の虫さめはうらな

吾爾ハ屋をむもあさねらふと  
葎や御存のあとの眉つくり

あしりのわくくすり扇

関守の心ゆるすや栗かまは

大和歌の中よりおのり

泊ぬめふ柿のきりかきを悲ひたり

蓋紙題詞

清原や流杯さりすあはれ

葎狩や山の阿もこゝろ虚ろ病

め中の葎うらな

葎狩や鼻のえさあるあはれ

舟中

あし山の田舎の並のや秋の暮

秋のや弱もゆるくを靴の上

稲葉んよ女侍さくすのこゝろ

秋の空 瓦上の移きをもあはれ

隅田高橋之記







切惣まゝにて

日盛を帯傘とせ萩子汗

水の山音

萩子汗をひかりやササキ

既松幸

獅子舞の胸分あす萩の萩

楓子幸

あしりぬい推の内併え

井筒を眺しる昼よ

いそれろと竹輪まむす小巻あ

田家

度々の卯うみ控り落穂う糸

妻臺ふ稲ちん窓へもゆふ

饑青流難波

芦川のうらを喰せて破外

隣家よもと控こくを

大絃ハ晒にえ流りある雁

元結のゆるるるを虫の声

お亭二節の貝をとらて

あけ出乃見よりておは新酒か



帝香月灯を憐  
 古寺や流紙あまの所ふ  
 駿府席番は旅もあつたふ  
 うよふ妙持もも木洗桶  
 日仙石玉まの席かあまの詩あり  
 蕨ずりや傘にうに昔鞆  
 あつみのうらめお  
 花子太常  
 三粟のくはちり打や角被  
 在東寺まで  
 偽甲のまらうりむらあるふ

松のそふみの火をいけり  
 感徴和るあまに  
 ともやや勢をよ玉に  
 品川泛鉤  
 唇の脈え送るえや舟の上  
 白毛の巻の遠舟と数と唇  
 あまめ喰らえり  
 貯啼や赤子の頬を吸ひ  
 呪檢まとりや浪や百舌の声  
 泥浪の鳴よ遠よりよみ小



詠の長上系

うら植子花の袂や女おき  
如是果のころを

二子山二子ひゆりん粟のうら

尾引淨教すあて

燕もおさめはくみうらうて

賈周や夢のげしきまゆ海

鹿の二声とりよふうらの

あつを誰か帰さる鹿の声

はばやみ子きよらげ流

木下

門立の袂くおる男鹿りよ

お祭やみ祭とくく蕨の尻

秋葉禪定の時

合お着て花よすくやあきいた

下山

のしるみ杖を投りあやうら

芭蕉ぬか蘭を悼める詞あ

嵐茶一子孤懸を何それむ

芋の子も芭蕉の秋をわらふ



めりやあつはしとてさるるも  
おちあきやをあげく人よ  
おのちあハ思ふあまよく 秋葉

二月堂あまのり多平七日  
新倉の信堂のさるる平  
いふことなきをいふ

日の目だぬあはれさるるに松外  
甚五丸あつりあつり  
けり快狂さるるせさるるあつり

産寧坂くさるる  
兼おあきさるるに松外  
あつり

戸部山庄

あつり松荏の空をほしく白  
あつりてあつりあつり松外

あつりあつり

谷くつげ麻のおさるる松外

三条橋上

片腕ハ都よのさるる松外

あつりあつり

おあきさるるあつり酒のさ  
お娘のほろろ流にあつり



管根

杖の上よりそとんくから村の裏

高雄よりと

け新嘗文覚家をつらせり

泊深よりと

柱んは云家の子造り八つせ山

山行

及後よお祭はくく片与の山

いせあそ

お祭よと能態の拓といを冠り

南天の突を包めと

南天の突を包めと

南天の突を包めと

南天の突を包めと

くんの山行

笈の角梢の落ふ志つれきり

七十の縁もそとすうりる度

いつくは稲を于際や大井川

山の端を了んあつすや破れ笠

水郷

唐鉦を流る水やあつす



富士

笠取し富士のきりぎりす  
あやもやいづれをさるる

背面達しを画て

西帝子八留守とてしる

旅思 二寸

こつこの指知らや水の香

みくくの路やいづれをさる

召した訓子方や花は

うづ花やさるる餅くふら

本多下総守の  
市代宴

後園

りきぬけの庭や澄摺菊の糸

手の内所敷こねれてきく花

旅行

駕籠お濡て山道の菊をこねり

志何しきりたは何何る菊の宿

荷合りたは老い

土室のよききりやきよの菊

きよの菊小侍てきよ花は

きよの菊や靴よりあやう



白鷺の墓石あり世をくわあ  
る重一―地子這菊をえおん  
こい誰よ知ののくりれ 袋菊  
素堂 孫菊の屋  
け菊く十の北酒乃亭主あり

昼菊

きく白く蒼ハ陽ふくねり

菜苑

菊を切花ゆつりもあうり

水鼻 ふくさめくくり菊抱

病起 千山ヨリ菊ヲ  
病起

大母衣乃ししちを押や紙の葉

三時めく重陽

酒やるぬの腋乃きくをお

宮川のやくり酒送せりて

重箱小花あそびの野菊外

みちとせのそし乃名よあそびの色  
みちとせのそし乃名よあそびの色

いつて我入七百のゆき菊よるん

竹苑のやとあそびをくも  
うへ―ちりく花奇あそび

出世者乃しとありしつり菊

翁はひまの交む子にせり

時服そ菊あはきく此芭外



十日菊

親世殿 十日の菊をかきて

女子を移うひそ

おかけらんや

かみ屎よろろふもむの婦が

十日菊

震宴のあまもふも菊贈

笠さくら西りの音は

菊を着てりしちさあつちや

袖の浦より貝アトしよ

白菊を貝の内実よせん袖の浦

那波を九所れあつちくらん

御連言の言状ともあはれ

大工事の久くお教や神の秋

御高もふあてなると

御極を死て髪はるすまの

内宮 法輝のき拜なるふ

卯の婦や 赤子もおいる神徳山

あま

日ハ所て古殿ハ旁のかくも

いづれゆくや侍るを

たしや小判あつて葉のふ



平津川よそ

花はよ祭主の喜を送りけり

冠里公侍りしすし祝きて

初唐や其六場を以て百足持

周竹の亂の昼よ

白鳥と一升入乃めく

栗家の妻を渡さふ

かつとすて福原淋しうさ

元禄辛未のころ大山根島へ系指

お川 紀りお喜略之

品河もつねあつし唐の音

とん

稻塚の戸塚子つくく田守が

後次

宿とりて東を回やられお月

いせ

あそきや離くの葛麦 畠

御句松よそ



生栗を握けめしる 山後抄

大山

腰押やうら若根乃りみら

石磨る茶僧

手み提し茶瓶やけめて茶の房

二間茶釜よそ

白うの尾髪みささけきり

由井うはる

おきふ一のきおやほのおと

雪乃下もて

坂うら宿の庚子や 茶乃初仕

露羅思た乃古樹のりともて

有一代の供奉の房や ちる 祝香

横儿追悼

一紙をよみ向よとるや 折糰

酒の初を切影りて名

一字を探りしよ用を

あいせをね おきをしつこの 定座入

自画 雁

斤迄かやの 小田の房

秋のられ祖父の ありそのと



白扇倒懸東海天とひるむ  
つまげりてさあつてまよ  
みずりいりてせらるるこのあし  
を帝立おほひて山の半腹より  
下りてまよるるを要よりすそと  
いふんしなむちりてして  
白き西又ひ糸や普賢富士

未曉吟

澄つるよ階子不立てさう菊ハ  
洞房の茶を象也まの笛を  
ぬげりりてせらるるを憐れ

とらふや笛の為ハ塗足履

悼朝叟

此人不二百十りのあはれ

吉田氏

唐祖も糸をさしらるる日向

*Faint bleed-through text from the reverse side of the page.*







芭蕉翁三回

志らくや此も舟旅を墓糸  
帆上げ舟河をや世田のふり

遊金園寺

八雲の櫓の板ををりしを  
蓑をきつて遊ぶとをあ夕し

大和めぐり世比

あはれなる之論の近きをり

芭蕉翁病床

吹井より病をよみし時雨

舟柿の夕日かたなるか  
翁猿乃し窓つらきわらわ  
時あたる碑下のそりて村霽

赤麻さむらのあま

小松はる人をあにまゐる山吹

當院に冥室什物すか  
中あも小松との松上  
箱のら子馬蹄さう子を硯の  
箱のら子馬蹄さう子を硯の

松陰の死の息を志くわ



世そらちりたりけりこの房を

三尺の力を西河乃一くおが

本多総列公千信成り夜  
あつ雨もひきくかきり  
のしるを後りせよと仰し

蝙蝠や柱を捨つか一と

守山の子よりを昔時あり

とりの月のおらふ籠りま

あふい 籠りをほりて

揚弓あたるのる女下り

井の流酒匂ハ格とあり

家こ乃半や居よりと大社

新井 上 乃 乃 乃 乃 乃

大和らりりせり

ころもりの城の寒きやのの

使者指書院一通るすむ

井波門主應心院殿  
あつそらみとあつ山乃二集  
あつそらみとあつ山乃二集

あつそらみとあつ山乃二集

風や沖よりきき山の子れ

あつそらみとあつ山乃二集

紅紫のち紅もあつ山の子れ

玄孫もや祖父のうらみ

と孫の者けりあつ山の子れ



つゝ綿の兔の耳をうらぐ

大町新宅

お仙の鏡つゞきの小崎屋

水仙の杉の星の月の夜

風の子の砂のけしの手の狐の尾

控のやのあのくのはのりのよのおのり

又の醫の師のあれを戯子

純汁よ又本件の吐り地

何脈あく水のまり下何系

何らげん藻魚はく白冬をを

表戎十九日くくえんくく

大黒のくく家あそく

酔はめと大黒あん夕々の子

あま板子小判投り黄備

系五十七の宅あて

嗚呼山代都ハ酒の有がう

人集の大板はうりを純汁

お益子鮑も互ちすの名は

生煮をあくとりあくとり

世中小鼻をあくあくとり

日本の風呂吹のくく比叡山







志りくくやあし 枯木乃夕附日

周旋するまで

の〜ひらる三井の二王や冬木立

風や勢田の小橋乃花を漣

芭蕉翁をえさるりて

お指をすみりさ運やむじき

石菖の房もあれあや山お花

か生のしゆのふついのをばて

縁くも孩子よいらんし強縁おを

むしせ世悲の重荷やあの子お着

起出てる志けき方や足袋取中

寐んや〜りあらんのこめを中

あ子着て〜り取中もこけしる

長途狂信

あの子をくばる濃もあひ井川

目ぼりをを氣おし取中の信世お

山をぬぬぬら色よの月をき〜

何とあくをお隣をばれきり

け木や頼のこれてああ月

果はや二をあきと 京片夜



新宅 二句

竹の場乃の庭如し炭俵  
籠みもやをばやんを籠  
をよあこ五りよ

白河の川に遊ぶお袖を納豆汁

霜月朔日の例を

徳人や嵐芝居をを籠

好柳の市庄

人をさしおのころおも夕涼  
静くせや暁いさむ下邳の橋

お豊考定七中のおと平

白河の橋をかゝるや桐火桶

幡別あむらぬふ一倍のすき

あると六十年の栄花を飛  
沼子きりあてし終りを取  
はらふとに神をまゝさる

ゆきふらふるふらふ

粟飯の焦り白あや栗の声

法雲寺老僧春色とどろく

原のや栗火の家の夷講



はひり片を指家住あいろ小  
蟻の目子白のこもや家の菊  
控人の為の切やて火おす  
鬚の糸木賊のひや東枯より

其のさう其根うをけを構

咆のうのせ貝を並りてたを  
と名をいりりりよせて

炭賣の炭をとりけをやこを

柯求おんのを向  
山茶をや指のぬらら盛抱

あく陣あしやをよ浪のり  
みうれて木浦よはるあはれ

山行

山火をうら噴出に雲おのち  
みとけしおらうけり池の響

寒芦画讚

向ふ岸しくし家いそげ霧の解  
氷もし蓋やうらら 鴛の中

住吉しんく

世をのひをよより流すやをの海



用防あを才阿くんまで改  
る行しよ一生涯あひあき  
をめぐ板くとのあやとや  
この甲よりやけらあや  
ひらひ出さる

火燧く青磁を拾りり

斤手打落しる火神を幸の  
まのうらまを

忠直と灰よりく火鉢くふ

名もこのりらふ下く  
新しき

炭より不乾のぬり手  
手摺り

三年成乾の圃ふ入

焼くや沙をよめる金の甲

炭竈三句

炭や子の猫とあしん巻のきん

炭よりや冷木龜井く朝の松

炭よりや隙のほお鼻をん

炭竈や煙を吐けた猿の声

かすすも其木たより後かり

うつし火の七輪をきけやあひく

埋りき草やくんを 薫に

炭屑みいやりはる木おを

とてあかのかの一車とのめ炭



寒蠅炉をめぐる

傍おれりあふる人の蠅

口切や袴のひびきは薩摩

梅津集新田一良かき

粘聖の宿まで送付し

こゝろ春を愛志つゝ一細代さ

不居安慰

多し響の幅を張るぬや灰せり

山中 高客

袷卷の松みくもや三種のぬ

並前ハひびきの謝や寒作り

十石ハ響ふつくこけりあんさ

冬川や鉄のすゝる料の糸

困傍橋

うけしゆや澄もあゝ橋柱

浮幅や氷の中よゝゝり松

軽一いつりりあひきほら

煮ゆや箕子の竹乃ゝす疏

あま

内蔵の古酒をゆらゝや室の梅

市隅の信ふり

宮草魚はしあけまを矢倉賣



揚屋のあきまゝのあきまゝの  
鴨の色をわらわらして

鴨の色や一巻の巻はたきけ  
心もや釜もゆるしゆるしあを

浦御らととゆ石と 大津崎

細い包よとらふん左の古巻

塩糖子や投てとあふ磯御

よき日和よ月のまゝとあふ磯  
妹もよハ嵐の足のとあふ磯

薩埵山とて

以後の猪首と彼ののあふ磯

所々鷹のつと地りあふ磯

京なる人は紫内とて

あふ磯のあふ磯のあふ磯

滝足やあふ磯と池の巻

東人北斎月次よ

沖の帆もつとつとや候あふ磯

あふ磯の上とて

兜の巻あふ磯とや寒念仏

あふ磯のあふ磯とあふ磯

酒飯の飲酒はあふ磯とあふ磯



去来家より

千のふらかたの川を舟に

ことく九めそくやじし流に

南都よのそく時

寒きや南大門のふらた力

ひら帯のちりり

ありひよのそく

これとさる縁起すんで里津紫

お神楽の鼻息白く面の内

雪買ふちを治さや雪の音

清みぬけりよそりて

あしれ雪の舞臺の目れ気色

知恩院所の宿とらて

初雪よおらたうらの音あふ

大津よあふよそ

雪の夏や船屋の影の色

ひら帯の宿あて

馬よりよ貪りしゆ雪の宿

震山のふら

めり思ふ門の雪はくを食ふ



西陣寺興行

おちふ人ものゝるの伏見舟  
あやもあひの軽一笠のこ  
らんやち赤子あつんする  
はらちや雀の枝おの小土足  
門のりふ字をばく

る小炭はくそハゆけ雪の門  
燐屋

窓鏡のうき世をぬにゆてん

官城御普請成給りて法家  
は、褒美ありとける也

陪臣ハ朱買臣し申す乃袖

色蕉を居をさしと

兼老ハ魚もあけに 庵のち

門のち梅何りやとさあせしり

山居の傍り

雪をぬえ後り茶を煮りた山さ

かも川よ一山れとらみとるを

釈迦とよ小路も雪の黒いありか

ちんせきをちる女のあしを  
こやいさげさめり

醉吟

雪うらややりのもをりす小忌衣



望敷山

為宮や 大の字枯る山の草  
戸障よりかゝる雪も 松乃声  
かゝりや 竹田へ 帰る鳥の音  
旅し女土作を 志す人

黒塚の客あしらにや 国乃音

立徘徊

けつちや内よめは 夫んを 誰  
めつしいおろけおは 垣あふ  
野川の音を 袂論よ ちらんりふ

望敷山 望敷山 望敷山

或所方より ちらんめちんを  
あつち上り

初雪ふねや ちらんめちんを

楠の瓶壺四回も 一回もや  
万客の唇を ころもせを

ちつちや 湯のミ所の大瓶壺

ちつちや 湯のミ所の大瓶壺

半袷の別添も 何れや 雪の松

人も 来ぬ 独酌

初雪や 十子成る 酒のこし  
軍兵を 園焚て ちらんや 雪磔  
松の音 ちらんりふ



前よりよき雪のり

敵軍の人おなりつけし雪

お雪の盆のゆきしきちあふ

出立し

ききよの犬を拂わ油の雪

まてあるとらふあふ

あふあや控てあるふ雪の宿

市中央

初雪の門を 橋ある夕ちんき

不分當春作病文

ほおと病を悟ありにあらは

極月十日西吹大坂のほお

いとほや足袋賣子おじうつのお

新堰めて食らあやうし師走が

餅花や灯もくく 壁の紙

餅と紙と宿ハきくくくく

やりとれそよ狭き道のらき



書かゝるをゆと一斗の巻柱

座右銘

以て中や登りし取らるる見書  
乳母あえて去ると義女あ年忘  
御前の中百殿よりくはり  
のりおの中は眠泥く

年忘し刈伯倫をあらはせし

震風流火志らすりて

妹よりや薑とけり餅の番  
煤掃てゆいぬる女房めりや

京より一巻をあらはせし  
かりの猫も回るあり

以て牛はひらり年あつる  
臘鬼五つの子を産り樊中よ  
やいおをいしてあけりけり  
可きいといひ

年をとる鬼も祝へ焚ぬ豆  
すけりひ溜りと候て世控  
童より志す所中や煤をい  
忠信ら芳野仕也やあはれ

有かしの親の悟氣もあはれ



困窓は羽帯をめぐり  
煤こもるとつもれを人の隙は  
鼻を掃孔雀の玉や煤こも  
御煤、翁ハ竹取

千山家より高小

割すまやハと女神宗男より  
揚屋に酔房して

意の年養紙巻を片く

鳥の布をれをあらん羽織との  
小似織行をあらん  
山陵のま方を海す  
女子の抱疾し  
餅の粉や必雪く  
あけらメをあげ  
市陽  
弱法師家門ゆき餅の札  
鳩歌屋の夕日志つげ



糸と松あきの市の夕あし

自海三十

子まのしんまのあしきまのあし

大洋譯

千觀のるもせりやとらる

雪窓

損料の史記をゆきの雪の雪

年の飛やひらぬのむすの物思

以年や絡評定しあゆを



